

愚かに勇ましく生きる

轡田 隆史

(ジャーナリスト・文筆家)

東西ドイツ統一の瞬間、ベルリンのウンターデンリンデン大通りを埋めた百万の群衆にもまれながら、どこからともなく次々に回ってくるシャンパンのピンをラツパ飲みしながら夜明けを迎えた。

八十五歳にして「酔眼妄想翁」と戯れに自称し、名刺の「肩書」にもしているぼくは、最初の「非常事態宣言」が出たとき、ベルリンのラツパ飲みを懐かしく思い出しながら、いま回し飲みしたらどんなことになるかしらなどと妄想した。

と同時に、この事態は長くつづくぞと覚悟し

た。だって、予防接種のためのワクチンの国産化は夢のような話で、ワクチン先進国に土下座せんばかりに「わけてください」と頼んで回っているのだから。

国民の大半に予防接種が行き渡らなければマスクは外せないのだ。そのことには触れずに政府は、「不要不急の外出、会合は自粛してください」とくりかえすばかり。

新聞をはじめとするメディアも、あの戦争中の「大本営発表」そっくりのそれを大合唱しているのだ。

では、「酔眼妄想翁」の覚悟とはどんなカク

ゴなのか。ニンゲンは冬眠という熊や蛇たちの自然の仕組みを、急いで採用するわけにはゆかないのである。

平穏なときと同じ日常を構築する覚悟である。音楽会にも文楽にも行く。イギリスの大風景画家コンスタブル展にも行く。もちろん飲みにも行く。当然、電車にも乗る。スーパーに買い物にも行く。

轡田隆史（くつわだ・たかふみ）



一九三六年東京

生まれ。朝日新聞社で社会部デスク、編集委員、論説委員などを歴任し、世界各地へ特派。夕刊一面日「ニュースステーション」、NHK・FM「日曜喫茶室」にレギュラー出演。『「考える力」をつける本』（三笠書房）など著書多数。

ただし、である。常にマスクは二枚着用である。ポケットには、携帯用の消毒薬剤二種を保持する。噴霧式とドロリと出るやつを、ひんぱんに使う。

電車で座れないときも、吊り革にもどこにも触らない。踏ん張って立っているといい運動になる。ただし、大きな揺れや急停車に備えて、つかまるべきところを定めておく。

下車すれば手を消毒する。店に入るときにも消毒する。出るときもそう。「除菌ウェットシート」も持っているから、食う・飲む前には口を拭う。

帰宅したときは門に入る前に手を消毒し、玄関にはいつてまた消毒し、ついで手を薬用石鹸で洗う。

中学生のとき極東軍事裁判を傍聴して、ついでこの間まで威張っていた東条元首相やヒゲの荒木元大将たちが、シヨボクレ顔で座っているのを見たりした後遺症で、「お上」のいうことは信用しない体質になっている。

しかし、「消毒」だけはしっかりやっているつもり。

それで、「非常事態」の新宿の歌舞伎町にも行った。「酔眼妄想翁」だろうとジャーナリストの端くれである。「非常」時の歌舞伎町を知らなかったでは、「名」がすたる。

ベトナム戦争の末期、サイゴンにいれば安全なのに、わざわざ米軍のヘリに便乗して命がけで最前線近くまで出かけたなりしたのと、まあ似たような心境である。まことに愚かにも勇ましいジャーナリスト魂ではないか（笑）。

歌舞伎町の安全な（！）居酒屋で一杯やって帰途についた。感心にも閑散とした歌舞伎町の間道から、大通りの雑踏に踏み出したとたんに、勢いよく転んだのである。

地べたで鼻を打った瞬間、不思議なことに七〇年も昔、サッカーの試合でボールを顔面にくらったときのこと、走馬灯のように鮮やかに脳裏を駆けめぐった。

プールの『失われた時を求めて』の主人公は、紅茶にひたしたマドレーヌを口にした瞬間、往時を思い出すのだけだ！ こちらは歌舞伎町のスッテンコロリンだ。

そんな愚行を告白できるのも、まさに「不要

不急」の外出をしたおかげである。
嗚呼それにしても、ワクチンはいつ来るのかしら？ と医療も女性の地位も世界最低国の妄想翁の嘆きは深い。